5．海外機関訪問報告

英国・オランダにおける機関リポジトリに関する取組みについての調査・視察

情報管理課専門職員（リポジトリ）　斎藤　未夏
情報管理課電子図書館係　平田　完

1. はじめに

本学では、平成18-19年度CSI委託事業（領域２）「国内学協会等の著作権ポリシー共有・公開プロジェクト」（主担当大学：筑波大学、連携大学：神戸大学、千葉大学）の活動の一環として、学協会著作権ポリシーデータベース（SCPJ：Society Copyright Policies in Japan）[1]を構築・運営している。本視察の主たる目的は、このデータベースのモデルとなったSHERPA/RoMEO[2]の運営組織SHERPA（Securing a Hybrid Environment for Research Preservation and Access）[3]の拠点であるノッティンガム大学を訪問し、機関リポジトリを取巻く著作権に関する諸課題についての日本の取組みを紹介するとともに、今後の方向性や連携の可能性について議論することである。併せて、機関リポジトリに関する先進的な取組みを行っている英国及びオランダのいくつかの機関を２手に分かれて訪問し（表１参照）、その運営方法等についての現状を調査した。

なお、本視察は、ディジタルリポジトリ連合（DRF：Digital Repository Federation）の主要参加機関である北海道大学、千葉大学、金沢大学、広島大学と共同で実施した。

表１　日程及び訪問機関

月　日	訪　問　機　関　等	
平成20年１月21日（月）	移動：成田→ロンドン	
１月22日（火）	ノッティンガム大学（SHERPA）	
１月23日（水）	リーズ大学（White Rose）	バース大学（UKOLN）
１月24日（木）	サウサンプトン大学	移動：ロンドン→アムステルダム
１月25日（金）	移動：ロンドン→	アムステルダム大学 移動：アムステルダム→
１月26日（土）	→成田	

2. SHERPA（ノッティンガム大学：University of Nottingham）

SHERPAは、英国情報システム合同委員会（JISC：Joint Information Systems Committee）の助成を受けて実施されている機関リポジトリ推進プログラムである。現在、ノッティンガム大学を中心とした24の高等教育機関にBritish LibraryとAHDS（Arts and Humanities Data Service）を加えた26機関が参加しており、研究成果を迅速かつ効果的に世界に広く公開することを目指して、学術コミュニケーションに関する様々な課題について調査・分析を行うとともに、機関リポジトリの構築・運営を支援する活動を行っている。進行中のプロジェクトとしては、世界のリポジトリのディレクトリであるOpenDOARの運営や、ドイツ、フランス、オランダをはじめとするEU参加国の組織と共同し

SHERPAメンバーとともに

てヨーロッパのリポジトリ・ネットワーク・インフラストラクチャの構築を目指すdriverプロジェクト、英国内のリポジトリを対象とした支援サービスRSP（Repositories Support Project）などがある。

SHERPA/RoMEOもそういったプロジェクトの一つと位置づけられ、2002年から2003年に実施されたRoMEOプロジェクト（Rights MEtadata for Open archiving）をSHERPAが継承したものである。SHERPA/RoMEOが提供しているデータベースでは、出版社の著作権と、プレプリント・ポストプリントを論文著者がセルフアーカイブすることに対するポリシーを、出版社名、雑誌名、ISSN等から検索できる。また、各出版社のアーカイビング・ポリシーは、green（プレプリント・ポストプリント共にアーカイブできる）、blue（ポストプリントをアーカイブできる）、yellow（プレプリントをアーカイブできる）、white（アーカイブできない）の４つに色分けされて示される。2008年５月現在、392の出版社のポリシーが掲載されており、その色別内訳はgreenが133（34％）、blueが90（23％）、yellowが42（11％）、whiteが127（32％）で、68％の出版社が、何らかの形でのセルフアーカイブを許諾していることを示している。

ミーティング風景

今回のミーティングでは、SHERPA ManagerからのSHERPAの組織運営体制等についての概要説明の後に、（１）我々によるSCPJプロジェクトの活動概要説明、（２）SHERPA側からのSHERPA/RoMEOの概要説明、（３）SHERPA側からのRoMEOデータベースの将来構想、の３点に関するプレゼンテーション及びディスカッションが行われた。

（２）のセッションでは、RoMEOのホームページへのアクセスが2007年12月の１か月で約１万件、１日あたり約4,000件にも上っているとの説明があった。ポリシー情報のアップデートは、データベースの利用者から１か月に約30～60件寄せられるsuggestion formやe-mail、パートナー機関から寄せられる情報に基づき行われるほか、出版社とのコミュニケーション（Webサイト、e-mail、手紙や電話）などによっても行われる。また、雑誌の情報はBritish Libraryの提供するZetocサービスにより入手している。これらのRoMEOに関する実務は、管理運営のためのフルタイム職員のほか、技術面を担当するパートタイム職員によって行われているとのことである。

（３）のセッションでは、RoMEOデータベースの将来構想として機能拡張（出版社に関する新たなフィールドの付与と多言語化等）及び海外フランチャイズの導入による多言語情報を強化するプランが示された。さらに、このプランが、１年間という期間限定のJISCの助成によるものであり、予定の期間が終了した後も、すでに協力を表明しているドイツ、オーストラリア等による国際協調をベースにしてさらにこの事業を継続するためのJISCの助成を得たいと考えているとの説明があった。加えて、SHERPA側から、この国際協調とフランチャイズの候補に日本が加わることについての打診があった。

フランチャイズの具体的内容は未定ではあるが、このことは、著作権に関する諸課題に取組む海外機関との国際的な連携を推進するための方策を模索するSCPJプロジェクトにとって、今回の訪問の大きな成果と言えよう。

3. リーズ大学（University of Leeds）

リーズ大学は、19世紀に創設された Yorkshire College of Science and TechnologyとLeeds Medical Schoolの２校を合併して1904年に設立された、学生数約30,000人、教職員8,000人を有する大規模大学で、イングランド北部に位置している。

ここでは、近隣のヨーク大学、シェフィールド大学とコンソーシアムを形成しており、リポジトリについ

ても３大学共同でWRRO（White Rose Research Online）[4]を構築・運営している。日本でも広島、山形等で県内の大学と連携して共同リポジトリを立ち上げる動きがあり、WRROはその先行事例と言える。

リーズ、ヨーク、シェフィールドの３都市は、ヨーク家の紋章にちなんだ呼称“White Rose”の名のもとに伝統的に結びつきが強い。３大学間においても、以前から様々な面で連携を行ってきており、WRROの構築・運営もその流れの一つと言える。

WRROの運営方針や資金に関する総括的な意思決定は、各大学の担当者１名から構成される、リポジトリに関する代表者会議“Steering Group”において行われる。また運営に関する実務については、３大学で費用を供出して２人の職員を雇用し、３大学分の作業を行っている。なお運営のための資金は、この３大学からの拠出のほか、JISCからの助成を受けており、JISC分が資金総額の約半分を占める。３大学の拠出金負担の割合は、大学の規模に関係なく等分にしている。とは言え、３大学のうち最も規模の大きいリーズ大学は、システムや人といった面で他の２大学より負担がやはり大きいとのことである。

リーズ大学におけるWRROへのコンテンツ登録は、盗用を心配する研究者が登録したがらないなど、セルフアーカイブはもちろんのこと、図書館による代行登録を行ってもなかなか進まない状況である。リーズ以外の２大学はすでにアーカイブポリシーを定めており、リーズにおいても近々制定される予定ではあるが、強制力を持つわけではないため、すぐにコンテンツ登録促進につながるとは考えにくい。

また、APS（American Physical Society）等の出版社から、「WRROは３大学で連携して運営している共同リポジトリであり、リーズ大学の機関リポジトリとみなすことはできない。よって、通常、機関リポジトリに対して認めている出版社版（雑誌に掲載された形式での論文ファイル）の登録も、WRROに対しては認められない。」との反応があり、対応に苦慮しているとのことである。その結果、フルテキストの登録がなかなか進まず、現在はメタデータのみのコンテンツがかなり多い。

複数機関が連携して運営する共同リポジトリを機関リポジトリではないとする出版社の反応は、非常に興味深いものである。すでに共同リポジトリは、WRRO以外にも構築されつつあるが、出版社からこのような反応があったケースはあまり聞いたことがなく、出版社が規定するリポジトリに対する著作権ポリシーの中で、今後、共同リポジトリに関して何らかの制限が入ってくる可能性も考えられる。WRROをはじめとする共同リポジトリに対する出版社側の動向に、引続き注目していきたい。

4. サウサンプトン大学（University of Southampton）

サウサンプトン大学は1862年に設立された。イングランド南岸に位置し、ロンドンからは鉄道で１時間の距離にある。学生数20,000名、教職員数5,000名、３学部20学科を有する英国有数の研究大学である。また、学術研究成果のオープンアクセス化のパイオニアとしても知られ、特に、リポジトリ構築ツールであるEPrintsの開発で有名である。

サウサンプトン大学のリポジトリe-Prints Soton[5]は、“deposit anything for research, anything somebody want”のポリシーのもと、形態や公開の可否にかかわらず登録を行っている。現在のコンテンツの内訳は、レポート類（42％）、conference paper（22％）、雑誌論文（21％）、図書（７％）、学位論文（７％）、ファクトデータ（１％）となっている。

スタッフはコアスタッフとして数名が携わっており、そのほかに図書館の職員はほぼ全員、何らかの形でリポジトリに関係した仕事を行っている。

リポジトリへのコンテンツ登録は原則としてセルフアーカイブだが、図書館が代行して登録することも行っている。プロモーション活動としては、研究者コミュニティへの個別のプロモーションが主で、メールやブログ、チラシなどといった全般的な活動については効果の面から否定的でほとんど行っていない。

フルテキストの登録数は、コンテンツ全体の10％程度にとどまっている。これは、とにかくまず登録してもらうことが優先というポリシーに基づき、メタデータだけでもとにかく登録してもらうようにし、フルテキストの登録については後から行うようにしているためである。また、フルテキストの有無にかかわらずとにかく登録することで、研究成果全体、つまりサウサンプトン大学で行われている研究のすべてについて、リポジトリを見れば把握できるようになるということも意図している。

リポジトリの最先端であるサウサンプトン大学で、フルテキストの登録率が10％程度という話は、日頃フルテキストの登録数をあげることに奔走している者にとっては、非常に衝撃的であった。また、フルテキストの登録よりもメタデータの登録を優先し、論文が無料で読めることよりも、大学での研究を把握することに重きを置いている点が、リポジトリへの見方・考え方の違いについて考えさせられる機会となった。

5. UKOLN（バース大学：University of Bath）

UKOLNは、JISC等の助成を受けて、電子図書館、情報システム、書誌管理、Web技術といった分野における実践的な情報を提供することを目的とした、バース大学に本拠を置く研究組織で、Ariadneをはじめとするネットワーク情報サービスの提供や、ワークショップ・会議の開催などを行っている。

今回のミーティングでは、（1）バース大学のリポジトリ担当者によるバース大学のリポジトリOPuS：Online Publications Storeの説明、（2）リポジトリ研究チーム（RRT: Repositories Research Team）のメンバーによるJISC及びRRTの業務の説明、（3）RRTメンバーによる２つのプレゼンテーション（e-science関連プロジェクトとメタデータを利用したソーシャルタギングに関するもの）、及び（4）北海道大学を主担当大学とする平成18-19年度CSI委託事業（領域２）「AIRway（Access path to Institutional Resources via link resolvers）プロジェクト（リンクリゾルバを通じた機関資源へのアクセス）」の説明と提案の４つのセッションが行われた。

RRTは、JISCが進めるDigital Repositories Programmeをサポートすることを目的として設置された。その業務は、各プログラム間の境界を超えて相乗効果をもたらすプロジェクトを発見し開拓するための支援や、各プロジェクトからのシナリオや事例の収集、国内外のリポジトリ活動の連携（e-Frameworkとの連携を含む）、プロジェクトとプログラムの成果の結合、相互運用性の標準的な活動とリポジトリのアーキテクチャの係合等、非常に多岐に渡る。またチームは、UKOLNとJISC CETIS（JISC Centre for Educational Technology and Interoperability Standards）のメンバーで構成される共同チームである。

英国におけるリポジトリに関する先端的研究の状況について、研究者自身から説明を受けることは大きな刺激となった。また、（4）のAIRwayに関するセッションでは、AIRway採用のための英国をはじめとしたヨーロッパでの広報拡大の可能性について提案し、様々な示唆を得ることができた。今後、引き続きRRTメンバーと連絡を取り合い、協調関係を継続していくことが、AIRwayの国際化のために重要であると考えられる。

6. アムステルダム大学（Universiteit van Amsterdam）

アムステルダム大学は、学生数25,000名、教職員数5,000名の、1632年に設立されたAthenaeum Illustreを母体とする非常に歴史ある大学である。

アムステルダム大学のリポジトリであるUvA-DARE（The Digital Academic Repository of the Universiteit van Amsterdam）[6]は、オランダの高等教育支援機関であるSURF財団が構築・運営するオランダのリポジトリ・ポータルDAREnetと連携することによって導入・開発が進んだ。オランダ国内の各大学は緊密に連携しており、国全体で担当者の連絡が密に行われている。さらに、国内の全大学が同一の研究者情報システムMETISを導入しており、アムステルダム大学ではMETISの更新時にコンテンツもポストされるようになっ

ている。各大学のリポジトリはDAREnetによってハーベスティングされるほか、王立図書館Koninklijke Bibliotheekのe-Depotにも転送され、国レベルでの恒久的保存が図られている。なお、DAREnetは、2008年４月に科学技術情報ゲートウェイNARCISに統合された。これにより、NARCISにリポジトリの論文等の学術コンテンツ約15万件が加わった。

オープンアクセスのためのアドボカシー活動としては、JISCとSURFが共同で作成した出版契約書（Licence to Publish）[7]を利用して、論文出版時に非独占的権利を保持するよう教員に対して呼びかける活動を行っている。教員は、この図書館の著者の権利の保持についての活動に好意的に対応してくれるとのことであるが、オランダの全大学がベルリン宣言に署名しているといった状況がこのようなアドボカシー活動を促進しているものと思われる。

これらのリポジトリに関する積極的な活動の一方で、アムステルダム大学の電子図書館では、リポジトリのみを焦点とせず、全ての電子的資源（リポジトリ、Webサイト、電子ジャーナル、電子ブック、エンサイクロペディアなど多様であり、購入コンテンツ、作成コンテンツであるとを問わない）をターゲットとして開発を行っている。というのは、利用者にワンストップのサービスを提供することが電子図書館の目的であり、利用者の視点に立てば「利用できる」ということこそ重要であって、その資源がオープンアクセスのコンテンツであっても電子ジャーナルの論文であっても違いはないと考えているためである。

日本の大学におけるリポジトリに関する活動を鑑みれば、大学レベルでのオープンアクセスに関する擁護活動はまったく行われていないと言ってよい。日本はオランダと異なり、ベルリン宣言への署名がなされていないという状況とは言え、いかにして大学、さらには国全体を巻き込んだ活動を展開していくかが今後の大きな課題であると考えられる。

7. 終わりに

今回の調査・視察を通じて、リポジトリ先進国とされる英国・オランダの機関においても様々な困難を抱えていること、そして抱えつつもリポジトリを推進するための方策を模索し続けていることを実感することができた。また、SCPJプロジェクトにとっては、著作権に関する諸課題に取組む海外機関との国際的な連携の契機という大きな成果を得ることができた。国際連携に関しては、この成果を踏まえ、視察直後の１月30日・31日に大阪大学で開催されたDRF 国際会議2008において、オーストラリアのOak Law Projectをはじめとする同様の取組みを行っている各国の組織とミーティングを行い、悩みを共有するとともに、それぞれの活動を、国を超えて連携することにより国際的な大きな流れを実現したいとの共通の目標を確認することができた。SCPJプロジェクトの今後の方向性として、たとえば著作権ポリシーに関する国際的ポータルサイトの構築といった、連携を実現する方策について検討することを考えている。

最後に、訪問同行をご快諾いただいたDRF関係者及び快く送り出してくださった筑波大学附属図書館関係者各位に心から感謝申し上げる。

注記・参考文献

[1] http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/scpj/
[2] http://www.sherpa.ac.uk/romeo.php
[3] http://www.sherpa.ac.uk/
[4] http://eprints.whiterose.ac.uk/
[5] http://eprints.soton.ac.uk/
[6] http://dare.uva.nl/en
[7] http://copyrighttoolbox.surf.nl/copyrighttoolbox/authors/licence/から入手できる。